日本女性会議（男女共同参画）２０１３　あなん

「参加報告書」

江別市男女共同参画推進連絡協議会　工藤多希子

■第4分科会「まちおこし」　　平成25年10月11日（阿南市文化会館）

冒頭、分科会会長　日下旭氏より挨拶がありました。「全国からこの小さな町にようきたのう・・・　秋祭りのシーズン、村の八幡のお祭りに行ってもなあ～人も少なく衰退化しよっとる。この村を何とかしなきゃ・・・。

イベントに取り組む人達の“思い”を“小さな光”ととらえてどのように繋げていくことが良いのか話し合ってください。」

＜パネルディスカッション＞

「男と女、つないで灯す小さな光、広げていくのも女と男」

（有）環境とまちづくり代表・徳島大学客員教授の澤田俊明さんがコーディネーターとなり、５名のパネリストと共にディスカッションをしました。

このまちをどうにかしたいとの思いでイベントに取り組む人達がいる。しかし、イベントを「まちおこし」へと繋げていくには多くの課題がある。その問題解決のためのヒントを求め、地域での男性と女性のつながりの再生、身近で小さなまちおこし活動の継続と広がりについて、話し合いました。

1. 市民まちおこしの課題と可能性

・こんなことが分からない、どうしよう

・特に「継続」「広がり」が大切。でも大変である。

対象とする活動は、身近な活動、小さな活動、地域での活動とありますが、市民まちおこし活動におけるこうした課題は、全国的に各地域で直面しているものです。

2. パネリストからの事例紹介

若い人の地域に根差した活動は、周りの人の意識を変えるほどの活動で感動しました。

①阿南市スケートボード協会の取組

萩野敦士氏（阿南スケートボード協会（ASK）会長）

２００９年、地域・年齢・性別を問わず楽しめるスケボーを多くの人に広げたいと考え、県内で初めてスケートボード協会を設立。協会設立後、思い切りスケボーをする場所が欲しいと、専用施設開設のための署名運動を開始。しかし、スケボーに対するマイナスイメージがあったのか、なかなか理解が得られなかった。そこで、それを払拭しようと「地域草の根活動」をスタートさせる。地域イベントのお手伝い、お祭りでのゴミゼロ運動など、

３年にわたり活動を継続、ついに地域の人達から応援されるようになり、２０１１年専用施設が完成する。こうした活動が新たな活動へと広がり、女性メンバーが増え、日本女性会議のメンバーとも繋がりを持つようになった。男性だけでは表面的なことしか見えず、乗り越えられなかったと思う。男女の協力、支え合いが必要であり、日本女性会議に関われたことに感謝している。

②宝田青年会の取組

宝田青年会　会長　武市篤浩氏

２００９年に輝ける場所が欲しいと、宝田花火大会の復活をめざし会を発足。当初は男性だけで企画していた。気の合う仲間と飲みながら幼少時の楽しい思い出を語り合い、花火大会を復活させ継続していくために必要な資金調達や若者の参加について考えた。一軒一軒訪問し協賛を求め歩き、断られても歩き続けた。協賛に協力してくれた人に対するイベントを１回、２回、３回と続けていくうちに、女性達の気持ちにも変化が起きてきた。子どもが楽しめるイベントを考えれば子どもが笑顔になる。その子どもを観に親が集まってくる。普段味わえない楽しさに女性同士の輪が広がり、メンバーも協賛金も増えていった。若者が参加し、子どもが集まり、女性の参加が増えたことによって、みんなが笑顔になってまちの活性化につながった。

③加茂谷鯉まつり

加茂谷鯉祭り前実行委員長　福岡一郎氏

資金不足、スタッフ不足に苦労しながらも、子ども達の喜ぶ顔が見たくて続けてきた。その陰には「やめたらあかんでよ」と言う女性部の方達の励ましがあった。彼女達はイベントのお手伝いで資金を稼ぎ、こいのぼりの補修作業も手伝った。彼女達の応援があって続けて来られたという。お祭り小僧も６５歳となり、パートナーに感謝ですとのことでした。

パネリスト達は、日本女性会議の開催に向け、この１年間月１回ほどのペースで準備を進め、その中で新たなネットワークが生まれた。男性と女性（ひととひと）がコミュニケーションを取ることが大切であると分かったそうです。また、パネリストとして参加したことによって、普段の活動以外のことにも取り組むこととなり、自分自身も学ぶことができ感謝している、学び続けることで輝き続ける私達でいたいと話していました。

どのまちでも、自ら学び自ら行動する人たちがいる限り、まちづくりの実現に向け一歩前進できるのではないでしょうか。

3. 活動の広がり、継続

〇活動の広がり

・人とつながることで新たな事業が生まれる。

・事業は縮小させるのではなく、拡大し選別する。

〇活動の継続

・何のために、誰のために、という目標設定。

・資金の確保

・人の確保と変化

・役割分担の明確化、ルールづくり。

・女性の活躍や進出

※女性が頑張ると男性の応援が倍増。相乗効果が伴う！

【紹介された事例】

『五九郎マーケット』

JR 鴨島駅前の古民家を再利用した昭和の雰囲気を残したお店。空スペースを利用した市民参加のフリーマーケットにより継続的に資金作りを行っている。女性も男性もお互いに知恵を出し合い運営する仕組みとなっている。

『小松島港の再生』

古民家を利用した「ワンデーシェフ育成」や、特産品「やまもも」を使ったアイスクリームの開発、ちりめんを使った料理作り体験など、漁業と農業の協力によって、中心市街地の活性化、地域交流、担い手の育成、人・組織、それぞれの良いところを最大限に活かす努力をしている。

全体を通じて、日本女性会議に役員側で携わってきた皆さんが感謝の気持ちを持って運営されていると実感しました。

■交流会　　平成25年10月11日（阿南市スポーツ総合センター）

分科会で出会った参加者、講師、スタッフの交流の場として開かれ、「我が家のおもてなし」をコンセプトにした地元食材を活かした手造りの阿南料理を、竹の器でいただきました。市内の板前さんが合同で調理されたそうです。また、アトラクションでは一年に一度、お盆にしか見ることができない阿波踊りを披露していただき、賑やかな会話の輪も広がって親睦を深めることができました。

■開会式　　平成25年10月12日（阿南市スポーツ総合センター）

開会式のオープニングは「劇団夢創」の子ども達による力強い演技に感動しました。
この劇団は平成１０年阿南市文化会館夢ホールの落成記念事業として結成され、宮城県気仙沼市と交流があるそうです。東日本大震災の年、阿南市で震災復興支援合同公演を行い、舞台から全国に「がんばろう日本」を発信し活動を続けています。

■実行委員長　渡辺純子氏　ごあいさつ

日本女性会議の開催にあたり、申し込みが始まるまでは「田舎での会議に参加者が来てくれるだろうか」と不安を抱いておられたとのこと。しかし、「地方が変わらなければ男女共同参画社会は実現しない。」という強い思いで、第３０回の節目に阿南から発信したいと考えていたそうです。誘致までの道は決して平坦ではなく、企画案を出されても予算・施設などの課題が多く却下されてきました。その分、あきらめず準備を続け大会を開催する運びとなったことに、喜びと参加者への感謝が大きいと話されていました。

■基調報告

「日本の男女共同参画施策の現状と今後の課題について」

内閣府男女共同参画局長　佐村知子氏

《基調報告概要》

日本の男女共同参画施策の現状と今後の課題について、地域における男女共同参画の基盤づくりが重要な施策として位置付けられており、地域活動が行われている場を利用して推進している。その他にも女性リーダー等の人材育成研修を支援したり、仕事と子育て等生活とを両立できる環境整備にも取り組んでいる。さらに、防災分野において男女共同参画の指針を議論する中で、これからは防災復興・まちづくりなどへ女性登用を進める必要があり、また男性にも女性と同じ視点で男女共同参画の重要性を認識してもらう必要があるとお話しされていました。

■日本女性会議30周年記念シンポジウム

「いきいきわくわく小さなまちから新たなステージ」

「日本女性会議」とは、男女共同参画社会の実現に向けた課題の解決策を探るとともに、

参加者相互の交流促進や、情報のネットワーク化を図ることを目的とした全国規模の会議です。

記念シンポジウムでは、日本女性会議３０年のあゆみを振り返り、現状の問題点を探りました。～未来へつなぐ～ためには、女性のみならず男性の視点も取り入れて新たなステージへ進む必要があるとの提言がありました。

市場恵子氏をコーディネーターとして、ほか４人のパネリストによりシンポジウムが進められました。

①堀江敦子氏（スリール（株）代表取締役）

女性が働くことは当たり前になりましたが、自らの経験から社会における子育てに対する意識のなさを痛感。男女ともに「自分らしく働き、子育てする」環境にまだ至ってないことから、自ら大学で働く女性の子育て支援を研究して、２５歳で起業、保育サポート「ワークライフインター事業」を展開。性別も年齢も関係なくこれからの社会をみんなで考える機会にしたいと話されていました。

②渥美由喜（東レ経営研究所ワークライフバランス研究部長）

ワークライフバランスの先進企業のコンサルタントをしていると、社長が信頼している有能な社員はたまたま女性であったり、子育てしたりしている。その人達に辞めて欲しくないと考えている企業では、女性のみならず男性もいきいきと働ける状態になっている。このことを阿南から発信していきたいと話されていました。

③山本恭代氏（徳島大学泌尿器科講師）

女性研究者支援サポートセンターを開設し、ワークライフバランス実現に向けた支援を中心とした活動を四国の大学から全国の大学へ発信したいと話されていました。

④大山治彦（四国学院大学社会福祉学部教授・メンズセンター運営委員長）

男性学とは、男性が自分らしく生きることができるように、当事者である男性が男性の視点から批判的にとらえ直そうとする実践的な学問だそうです。
男が男らしさに拘らない社会にと思っていたことから、これまでのご自身の生き方を振り返り、残りの人生を豊かにするための指針を与えてくれるとの思いで参加されたそうです。また男女共同参画の意義について、男と女は、どちらが先とか優れているとかではなく互いに認め補い合うべきもので、このジェンダーフリーの考えは女性のみならず男性の理解も深まれば日本の未来を明るくするものとお話しされていました。この大会に参加して今日の日を迎えるまでが自分にとって宝になったと感謝されていました。この感動を発信し、新たなステージへ・・・次の開催地札幌へとつなげていきたいとのお話しでした。

■最後に

今大会の参加者２，４１５人中、男性が４９２人と２割を占め、「女性しか参加できないと思っていた」との概念を崩し運営に携わった男性も大幅に増えたそうで、これからの男女共同参画に微笑ましいものを感じました。小さなまちから・・・新たなステージへということで、企画運営に際し、県、市、民間の全体の協力によって一つになった日本女性会議でした。初めて参加させていただき、私自身にとっても学びの研修となりました。心より感謝申し上げます。

＜阿波踊り＞

４００年の歴史を持つ徳島県発祥の盆踊りです。天正１５年に阿波一国を与えられた蜂須賀家政が徳島城を築城した際落成祝賀行事に城下の人々が躍ったのが始まりと言われているそうです。今では日本を代表する民族舞踊で「何は無くても阿波踊り」を披露していただき、感動のひと時を過ごすことができました。